

# U. S. A. の「カメラ・アイ」 (39), (42), (46), (50), (51) 評釈

広瀬 英一

「カメラ・アイ」(39), (42), (46), (50), (51)評釈…………… 1

「カメラ・アイ」とはなにか 一まとめに代えて……………29

本稿は、前稿、前々稿の「カメラ・アイ」(1), (25), (30)の評釈(『英文学会会報』第5号(1978), 第7号(1980) 大谷大学英文学会)に続くもので、テキストは、Houghton Mifflin の Sentry Edition (1963) による。右端の行数は、注釈の便宜上筆者が加えたものである。

## *The Camera Eye (39)*

daylight enlarges out of ruddy quiet very faintly throbbing wanes  
into my sweet darkness broadens red through the warm blood weight-  
ing the lids warmsweetly then snaps on

enormously blue yellow pink

today is Paris pink sunlight hazy on the clouds against patches <sup>5</sup>  
of robinsegg a tiny siren hoots shrilly traffic drowsily rumbles  
clatters over the cobbles taxis squawk the yellow's the comforter  
through the open window the Louvre emphasizes its sedate architec-  
ture of greypink stone between the Seine and the sky

and the certainty of Paris

the towboat shiny green and red chugs against the current tow-  
ing three black and mahoganyvarnished barges their deckhouse  
windows have green shutters and lace curtains and pots of geraniums  
in flower to get under the bridge a fat man in blue had to let the  
little black stack drop flat to the deck

15

Paris comes into the room in the servantgirl's eyes the warm  
bulge of her breasts under the grey smock the smell of chicory in  
coffee scalded milk and the shine that crunches on the crescent rolls  
stuck with little dabs of very sweet unsalted butter

in the yellow paperback of the book that halfhides the agreeable  
countenance of my friend

Paris of 1919

paris-mutuel

roulettewheel that spins round the Tour Eiffel red square white  
square a million dollars a billion marks a trillion roubles baisse du  
franc or a mandate for Montmartre

Cirque Médrano the steeplechase gravity of cellos tuning up on  
the stage at the Salle Gaveau oboes and a triangle la musique s'en  
fou de moi says the old marchioness jingling with diamonds as she  
walks out on Stravinski but the red colt took the jumps backwards  
and we lost all our money

la peinture opposite the Madeleine Cézanne Picasso Modigliani  
Nouvelle Athènes

la poesie of manifestos always freshtinted on the kiosks and  
slogans scrawled in chalk on the urinals L'UNION DES TRAVAILLEURS

35

FERA LA PAIX DU MONDE

revolution round the spinning Eiffel Tower

that burns up our last year's diagrams the dates fly off the  
calendar we'll make everything new today is the Year I Today is  
the sunny morning of the first day of spring We gulp our coffee 40  
splash water on us jump into our clothes run downstairs step out  
wideawake into the first morning of the first day of the first year

朝の光が赤味がかった静けさの中から広がりかすかに脈うちながらぼくのい  
るたのしい闇の中に入って来て薄れ心地よくまぶたを押えているあたたかい血  
に運ばれて赤さが広まりそして目を開くとぱっと突然の明るさ

青黄桃色の大きな広がり

今日がパリ 薄緑がかった青い空を背にした雲にさしているピンクの日  
の光がかすんでいる 小さな汽笛が甲高く鳴る 石を敷いた道をねむたげ  
にごろごろがたがた車馬が行くタクシーががーがーいう あの黄色はなぐさ  
め開けた窓からはルーブル美術館の灰色がかった淡い色の石造りの建物がセー  
ヌ河と空の間に落着いた姿を際立たせている

そしてパリの存在感

緑と赤に輝く曳き船が三艘の黒と赤褐色の荷船を引いてぼんぼん音をたて  
ながら流れをさかのぼって行く 荷船の甲板室の窓には緑色のシャッターと  
レースのカーテンと花の咲いているジェラニウムの鉢 橋の下をくぐる時に  
青い服の太った男は仕方なく小さく黒い積荷の山を甲板に落として平たくした

部屋に入って来るメイドの目の中に灰色のスモックの下の胸の暖かいふく  
らみの中にパリがある コーヒーの中のチョコレートの匂い熱いミルクそして三日  
月パンに音をたてて噛みつく日の光パンにはたいへんうまい塩ぬぎのバターが

4 U.S.A. の「カメラ・アイ」(39, 42, 46, 50, 51) 評釈(広瀬)

少しくつついている

ぼくの友の愛想のいい顔を半ば隠している本の黄色い紙表紙に

1919年のパリ

賭け金相互分配方式

エッフェル塔のまわりを回るルーレット赤の広場白の広場百万ドル十億マルク一兆ルーブルフランの低落かモンマルトルの委任統治か

メドラーノ・サーカス障害物競馬ガボ・ホールのステージで調子合わせをするチェロの低い音オーボエトライアングル この音楽人をばかにしてるわと老侯爵夫人が言ってダイヤモンドの装身具をチリンチリン鳴らせながらストラヴィンスキーの曲の途中で出て行く しかし赤い仔馬は後ろむぎに飛んでわたしたちは金をすっかりすってしまった

マグダラのマリアの絵の向いの絵 セザンヌピカソモディリアーニ

新しきアテネ

宣言の詩がキオスクにいつも新しく書かれていてスローガンが便所にチョークでなぐり書きされている労働者の団結が世界平和を築く

ぐるぐる回るエッフェル塔のまわりの革命

それは我々の去年の計画表を燃やし尽くす日付がカレンダーから飛び去る我々はあらゆるものを新しくするんだ今日は西暦一年 今日春の最初の日の明るい朝 コーヒーを一息に飲み水を浴び急いで服を着階段を走り下りすっかり目覚めて外に出る第一年の第一日の最初の朝

22-23. **Paris of 1919 / paris-mutuel** pari-mutuel とは、競馬で、勝者みんなが手数料などを差し引いた全賭け金をお互いに分配する方法を言うが、ドス・パソスはこの語(Paris と合わせて paris と s を加えて皮肉の)によって第一次大戦終結のための1919年のパリ講和会議、そしてヴェルサイユ体制を諷刺する。続く三行も、終戦

処理に当たったの戦勝国のナショナリズム批判の続きで、こんどはルーレットのゲームの比喩。

27. **Cirque Médrano** このサーカスは、その創始者 Ferdinand Beert (1835-1902) の名をとって、もと「フェルナンド・サーカス」と呼ばれていたが、それを19世紀末年 Jérôme Médrano (1849—1912) が再興してその名を与えた。
28. **Salle Gaveau** 「ガボ」は、1847年 Joseph Gaveau によって創立されたピアノ製造会社。この会社の施設が1908年に建てられた「ガボ・ホール」。
32. **la peinture opposite the Madeleine** the Madeleine は、マグダラのマリアを描いた絵(またはその彫刻など)と解する。これがどの美術館で、向いの絵は何か不明。

「カメラ・アイ ㉟」(1919, pp.296-97) は、新生の気運に満ち溢れる1919年春のパリを描く。最初の四行では、主人公が次第に目を覚まして明るい日の光が一面に広がる。目覚めたこの日がすなわちパリ (today is Paris) という破格の表現は喜びを表わす。続いて朝の町の物音や目に映るものが描写され、パリという町の存在感 (the certainty of Paris) が確かめられ、更にセーヌ河に行く船の描写が続く。主人公にとって、パリは部屋に入ってくる娘や娘の持ってくる朝食にも感じとれるほどのもの。22—26行は、転じて、ちょうどこの頃ヴェルサイユ宮殿で行われていた列国の利害の衝突する講和会議を鋭く突く。27—33行では、主人公らが出かけたパリのサーカス、音楽会などでの経験が列挙される。この頃のパリの芸術の活況、新しい動きは、「アテネの再来」(Nouvelle Athènes) と呼べるほどのもの。34—36行は、この頃のパリに(そしてフランス各地にも)、たとえば次の「カメラ・アイ ㊱」に描かれるような、一時的な政情不安、革命騒ぎがあったことを示す。更に、広く第一次大戦後の不安定な世界(それはまたロシア革命後間もない世界であった)は、ドス・パソスの目には、古い秩序が崩壊して新しいものが生まれつつある世界と映っていた。そして、

それは、政治上のみならず芸術上の革命の気運と感じられていた。たとえば、モダン・ライブラリー版 *Three Soldiers* の序文(1932)では、1919年春の想い出として、「春はいつでも転覆の季節であるが、その年の春は、レーニンは生きていたし、シアトルのゼネストは引き潮ではなく洪水の始まりに思えた。パリのアメリカ人は、演劇、絵画、音楽に酔いしれていた。ピカソは物を見る目を再構成し、ストラヴィンスキーはロシアの草原を我々の耳にたたきこんでいた。若者が軍服を脱ぐと、どこでも、エネルギーの流れがほとばしり出てくるように思えた」と書いている。(p.v.) また、*Theme Is Freedom* (1956) でも、「ヨーロッパでは、社会の革命は、アメリカ以上に、芸術の革命 (revolt of Bohemia) と密接につながっていた。芸術の革命は、すばらしい、ひじょうに面白い形をとって起っていた。……戦争は我々にパリを教えた。軍服を脱ぐか脱がないうちに、我々はストラヴィンスキーの音楽を聞き、ピカソやジュアン・グリスの絵を見、ディアギレフのロシアバレエの開幕の夜列をつくった。『ユリシーズ』は、シェイクスピア・アンド・カンパニーで印刷されたばかりのところだった。……」と、ほぼ同様のことを述べている。(p. 41.) 従って、37行から終りまでの六行は、今日をもってすべての始まりの日としようという主人公の高揚した気持を表わしている。

全体として、この1919年4月前後のパリ(セヌ河に面した ジャック・ローソンの下宿であった)におけるドス・パソスの精神の高揚、気分の充実には目を見張るものがある。まさに狂気のごとき開放感、充実感に溢れていた。(cf. *The Fourteenth Chronicle*, pp. 248, 250.) ドス・パソスの実生活としては、小説を書き、多くの友と交わり、オペラやコンサートに出かけ、ソルボンヌの授業を受けという日々であったが、これはやはり戦後の疲弊したパリの現実の生活から遊離した審美家、「国籍離脱者」の生活であろう。そこから出てくる精神の高揚と決意も、具体的な展望を欠いた、一時的なものにならざるをえなか

った。

### *The Camera Eye (42)*

four hours we casuals pile up scrapiron in the flatcars and four  
hours we drag the scrapiron off the flatcars and pile it on the side of  
the track KEEP THE BOYS FIT TO GO HOME is the slogan of the  
Y.M.C.A. in the morning the shadows of the poplars point west  
and in the afternoon they point out east where Persia is the jagged 5  
bits of old iron cut into our hands through the canvas gloves a kind  
of gray slagdust plugs our noses and ears stings eyes four hunkies  
a couple of wops a bohunk dagoes guineas two little dark guys  
with blue chins nobody can talk to

spare parts no outfit wanted to use 10

mashed mudguards busted springs old spades and shovels en-  
trenching tools twisted hospital cots a mountain of nuts and bolts  
of all sizes four million miles of barbedwire chickenwire rabbitfence  
acres of tin roofing

square miles of parked trucks long parades of locomotives 15  
strung along the yellow rails of the sidings

KEEP THE BOYS FIT TO GO up in the office the grumpy ser-  
geants doing the paperwork don't know where home is lost our  
outfits our service records our aluminum numberplates no spika de  
Engliss no entiendo comprend pas no capisco nyeh panimayoo 20

day after day the shadows of the poplars point west northwest  
north northeast east When they desoit they always heads south the

corporal said Pretty tough but if he ain't got a soivce record how  
can we make out his discharge KEEP OUR BOYS FIT for whatthehell  
the war's over

scrap

四時間かけて我々はぐれ兵は平台型貨車にくず鉄を積み上げ四時間かけて  
それをひきずり下ろし線路のわきに積む 兵士をいつでも帰国できるよ  
うにしておこう というのが Y.M.C.A. のスローガン 朝はポプラの樹  
々の影は西を指し午後はペルシャの方向の東を指す ぎざぎざの古い鉄がカ  
ンパスの手袋ごしに手にくい入る灰色のスラッグの埃状のものが鼻や耳につま  
り目を刺す 四人のハンガリー人 二人のイタリア人 一人の中歐人  
スペイン人たち ギニア人たち 青いあごをして誰も話の通じない二人  
の黒い男

どの部隊も使いたがらなかった予備の部品

つぶれた泥よけ折れたスプリング古い鋏とシャベル塹壕構築用の道具ねじ  
曲った病院用簡易寝台 山と積まれたあらゆるサイズのナットとボルト  
四百万マイルの長さの有刺鉄線金網防柵 何エーカーものとたん板

見渡すかぎりの駐車したトラック 引き込み線の黄色い線路には珠数つ  
なぞの長い機関車の列

兵士をいつでも帰れるようにしておこう 事務所で書類を扱う不機  
嫌な軍曹たちは故郷とはどこか分っていない部隊にもはぐれ軍務記録もアルミ  
の所属標章も失くしている英語話せない分らない分らない分らない分らない  
ノー・エンティエンド ヨンプラン・バ ノー・カビスコ ニエ・バニマエー

毎日毎日ポプラの樹々の影は西北西北北東東と指す 脱走する時はいつ  
でも南に逃げるものなんだと軍曹は言った つらいだろうが軍務記録がなけ  
ればどうして除隊証明が書ける 兵士をいつでもどうするようにしておけ

というんだ 戦争は終わったんだ くず鉄

19-20. **no spika de Engliss no entiendo comprend pas no capisco nyeh pani-mayoo** 英, 西, 仏, 伊, 露語をそれらしく並べたもの。第7-8行にでてくる兵隊たちの話すことばであろう。

「カメラ・アイ (42)」(1919, pp. 196-97) は、第二部の最後のもので、第一次大戦という巨大な浪費を象徴的に描く。ドス・パソスは、1919年の6月から7月にかけての数週間、軍務記録がないために除隊できず、ジューブルの除隊地で所属部隊とはぐれた同様の身の浮浪兵たちと無駄な労働をさせられるが (cf. *The Fourteenth Chronicle*, p. 254; *The Best Times*, p. 92), この時の経験がこの「カメラ・アイ」で描かれる。主人公たちの置かれている状況と対照されて、Y.M.C.A. の標語がくり返し掲げられては揶揄され、怒りの一因にもなる。やはりくり返されるポプラの樹々の影が西から東へ動くという描写は、ここで無益に過ぎてゆく一日一日が耐えがたいことを意味する。

この「カメラ・アイ (42)」で圧倒的なイメージは、「戦争が終わった」後の、何の役にもたたぬ鉄塊の山である。最初のパラグラフの、生身の人間を刺すくず鉄、そして、10-16行で、カタログ的に列挙される、壊れた、また不用になった莫大な量の戦争用の鉄製品、これらは、戦争がいかに大きな浪費であったかを示す。そして後に残ったものは、ただ、「くず鉄」。

### *The Camera Eye (46)*

walk the streets and walk the streets inquiring of Coca-Cola  
signs Lucky Strike ads pricetags in storewindows scraps of overheard  
conversations stray tatters of newsprint yesterday's headlines sticking

out of ashcans

for a set of figures a formula of action an address you don't quite 5  
know you've forgotten the number the street may be in Brooklyn a  
train leaving for somewhere a steamboat whistle stabbing your ears  
a job chalked up in front of an agency

to do to make there are more lives than walking desperate the  
streets hurry underdog do make 10

a speech urging action in the crowded hall after handclapping  
the pats and smiles of others on the platform the scrape of chairs the  
expectant hush the few coughs during the first stuttering attempt to  
talk straight tough going the snatch for a slogan they are listening  
and then the easy climb slogan by slogan to applause (if somebody 15  
in your head didn't say liar to you and on Union Square

that time you leant from a soapbox over faces avid young  
opinionated old the middleaged numb with overwork eyes bleared  
with newspaperreading trying to tell them the straight dope make  
them laugh tell them what they want to hear wave a flag whispers 20  
the internal agitator crazy to succeed)

you suddenly falter ashamed flush red break out in sweat why  
not tell these men stamping in the wind that we stand on a quicksand?

that doubt is the whetstone of understanding is too hard hurts in-  
stead of urging picket John D. Rockefeller the bastard if the cops 25  
knock your blocks off it's all for the advancement of the human  
race while I go home after a drink and a hot meal and read (with  
some difficulty in the Loeb Library trot) the epigrams of Martial

and ponder the course of history and what leverage might pry the  
owners loose from power and bring back (I too Walt Whitman) our 30  
storybook democracy

and all the time in my pocket that letter from that collegeboy  
asking me to explain why being right which he admits the radicals  
are in their private lives such shits

lie abed underdog (peeling the onion of doubt) with the book 35  
unread in your hand and swing on the seesaw maybe after all maybe  
topdog make

money you understand what he meant the old party with the  
white beard beside the crystal inkpot at the cleared varnished desk  
in the walnut office in whose voice boomed all the clergymen of child- 40  
hood and shrilled the hosannahs of the offkey female choirs. All you  
say is very true but there's such a thing as sales And I have daugh-  
ters I'm sure you too will end by thinking differently make

money in Now York (lipstick kissed off the lips of a girl fash-  
ionablydressed fragarant at five o'clock in a taxicab careening down 45  
Park Avenue when at the end of each crosstown street the west is  
flaming with gold and white smoke billows from the smokestacks of  
steamboats leaving port and the sky is lined with greenbacks

the riveters are quiet the trucks of the producers are shoved  
off onto the marginal avenues

winnings sing from every streetcorner

crackle in the ignitions of the cars swish smooth in ballbearings  
sparkle in the lights going on in the showwindows croak in the klaxons

tootle in the horns of imported millionaire shining towncars

dollars are silky in her hair soft in her dress sprout in the elaborately contrived rosepetals that you kiss become pungent and crunchy in the speakeasy dinner sting shrill in the drinks

make loud the girlandmusic show set off the laughing jag in the cabaret swing in the shufflingshuffling orchestra click sharp in the hatchcheck girl's goodnight

60

if not why not? walking the streets rolling on your bed eyes sting from peeling the speculative onion of doubt if somebody in your head topdog? underdog? didn't (and on Union Square) say liar to you

街を歩きに歩いてコココーラの看板ラッキーストライクの広告店のショー・ウインドーの中の値札ふと耳にした会話のはしばし散らかっている新聞紙の切れ端しごみ箱から突き出ている昨日の新聞の見出しに訊いてみる

訊くことは一組の数字行動の法則よくは知らない住所番地を覚えていないその通りはブルックリンにあるかもしれないどこかへ出て行く汽車耳を刺す汽船の汽笛職業紹介所の前にチョークで書かれた仕事

やるんだするんだ絶望して街を歩くよりもっと多くの人生がある急げ負け犬よやるんだ するんだ

演説を満員のホールで行動を呼びかける拍手の後演壇の上の他の人々に肩を叩かれ微笑みを送られる椅子が床をこする音待ちうける沈黙少しばかりの咳の音率直に話そうとして最初ことばがつかえるなかなか進まないスローガンに飛びつく彼らは聞いているそれからはスローガンを並べるときに楽に拍手喝采となる(もし自分の頭の中の誰かに嘘つきと言われなければだそしてユニオン

・スクウェアで

その時はソーブボックスからみんなの顔の上にかぶさるようにした 熱心に聞いている若者頑固な老人過労でぼんやりしている中年みんなの目は新聞を読むことかすんでいる 確かな情報を知らせたい 笑わせろ聞きたがっていることをしゃべるんだ旗を振れとひたすら受けることを望んでいる心の中のアジテーターは囁く)

突然恥づかしくなってもり顔を赤くしてどっと汗をかく 吹きさらしの中で足を踏み鳴らしているこの人たちに我々は流砂の上に立っているんだとなぜ言わぬ 疑いは理解を鋭くするもの耐えがたいもの苦痛を与えるものだとなぜ言わぬアジったりする代りに ジョン・D・ロックフェラーの奴を見張れお巡りに頭をなぐられてもそれはすべて人類の進歩のため ぼくの方は一杯やって あったかい 食事をして家に 帰りマルティアーリスの 諷刺詩を読み (ラブ文庫の訳の方をどうにか)そして歴史の流れに思いをめぐらしどんな力があれば権力からその所有者を引き離しお話の本のような民主主義を取り戻す (ぼくもまたウォルト・ホイットマン) ことができるかを考える

そしてぼくのポケットにはいつもあの大学生からあの手紙彼はぼくが右だと思っていてなぜ右なのか説明を求めている ラディカル私生活はひどいもんだよ

ベッドに横になれ負け犬よ(疑いという玉ねぎの皮をむきながら)手にした本は読まないままそしてシーソーに乗って揺れろたぶんけっきょくたぶん勝者なんだろう 儲けるんだ

金を あの人の言ったことが分かるだろうあの老人白いあごひげを生やしくるみ色のオフィスのよく片づいたニスを上塗りした机のクリスタルのインクつぼの傍に坐っていたそのよくひびく声には少年時代に出会ったすべての牧師の声がそして調子外れの女性聖歌隊の神を讃える甲高い声が聞かれた き

みの言うことはすべて正しいしかし売り上げ高というものがあるからね それにわしには娘がいる きみもきっとしまいには別の考え方をするようになるよ 儲けるんだ

金をニューヨークでな(キッスで唇から口紅のとれた女の子流行服を着て香水の匂いをぷんぷんさせている時は五時パーク・アヴェニューを車体をかがせて走るタクシーに坐っている町を東西に横切る通りに来るごとに通りの西の端は金色に燃えたち港を出てゆく汽船の煙突から白い煙が渦巻くそして空にはドル紙幣が並んでいる

リベットは静かになり生産者のトラックは町の外れの道路に押しやられている

どの街角からも儲けた金の歌声

車のイグニッションのぱちぱちという音ベアリングのなめらかなしゅっという音ショーウインドーにつく明かりのきらめく音クラクションの低いかすれた音百万長者のピカピカの外車のタウンカーの警笛のピーという音

ドルのおかげで彼女の髪は絹のようドレスは柔らかくきみがキスする念入りにつくられたバラの花びらは初々しくもぐり酒場での食事はぴりりとした味で歯ごたえのあるものになりアルコールは鋭く舌を刺す

女と音楽のショーをはでにやれキャバレーでは笑いの浮かれ騒ぎを始めろ小刻みのオーケストラ演奏をスイングさせろクロークの女の子のさよならには強く舌打ちだ)

言われないのならしてもいいじゃないか 街を歩きベッドで転々とし目は疑いという不確かな玉ねぎの皮をむくことで痛むもし自分の頭の中の誰かに

勝者? 負け犬? 嘘つきと(そしてユニオン・スクウェアでも)言われないのなら

「カメラ・アイ (40)」(*The Big Money*, pp. 132-34) は、当てもなく街を歩き回ることにはやめて、ラディカルな運動に身を投じたいという気持と、運動に対する疑念の間で揺れるリベラルの主人公の姿を描く。

最初の二つのパラグラフ八行では、ドス・パソスの多くの人物のように、主人公は街を歩きに歩いて雑多なものを目にし耳にしているが、彼には探し求めているものがあるらしい。それは漠としているが、最終的には、彼のなすべきこと、仕事である。そこで、9—10行の、街を歩き回るより他になすべきことがあるはずだということから、11行以後の政治演説をする主人公に移る。満員のホールで演説を始める時の緊張、スローガンを放りこんではアジってゆく時の盛り上がり、そして野外のユニオン・スクウェアの集会でも聴衆に受けたいという内心の欲求。ただし、これには「頭の中のもう一人の自分に嘘つきと言われなければ」という留保がついている。だから、22行からの主人公は急にどもり始めて、集った人々に、ほんとのこと、「疑うことが理解を増すもの」と言えないかと悩む。25行からは転じてシニカル。それでもマルチアーリス(一世紀のローマのエピグラム詩人)の諷刺詩に気持の吐け口を求め、まじめになって歴史の流れに思いをめぐらし、ホイットマンにならって、アメリカ民主主義の再生を夢見る。32—34行は、右寄りを説明せよという大学生からの手紙が気になっていることを示す。続く一文は、それに対する主人公の答えと読む。35—37行は、ベッドに横になって、ラディカルな運動に対して次から次へと尽きぬ疑念を新たにしながら、ひよっとしたら、けっきょく、自分は一番下にいる敗者ではなく一番上にいる優者ではないかと思えてくる。38—43行は、金を儲けるんだという声に続いて、きちんと片づいた小ぎれいなオフィスで、正論を吐く主人公に対して、主人の老人(たとえば、出版社や会社のオフィスと考える)は、売れなくちゃいかん、いずれは分るだろうとあしらうが、その声はお上品で独善的なエスタブリッシュメントのそれである。44—48行は、ニューヨ

ークで金がある生活の一生態を描く。49—50行は、仕事らしい仕事、真の労働は町の中心には見られなくて、そこで聞こえる物音は、51—54行のような横行する自動車などの金の歌。55—60行も、ドルが可能にする享楽の世界。以上の44—60行は、括弧にくくられた部分で、金を儲けたらどういう世界が待っているかを描いてみせるが、61行からの最後のパラグラフは、本筋にかえってのまとめの部分。61行の if not why not? は、if somebody in your head didn't say liar to you, why not make them laugh tell them what they want to hear wave a flag ととる。つまり、もう一人の自分に嘘つきと言われぬなら人々にアジって行動を促してもいいではないか、と解釈する。そう思いながらも、最後の三行ではまた留保条件をくり返し我が身をふり返る。けっきょく、リベラルの主人公は、最後まで確たる自信は持てないでいる。(次の「カメラ・アイ (47)」でも主人公は、「疑念という古いレインコートは質に入れてしまえ」と自ら言いきかせ、決意を新たにして出発し直そうとするが、やはり動揺している。)

この「カメラ・アイ (46)」は、帰国して、グリニッチ・ヴィレッジに出入りし、何を生涯の仕事とすべきか、どう生きてゆくべきかを考えていた1922年頃のドス・パソスを描いている。ラディカルな運動に対して疑念を抱き、一方では、リベラルな知識人であることに自嘲の念も感じ、自身の生き方に展望を見出せないでいる姿がここにある。

なお、1920年代初めに、ドス・パソスがアジ演説をした(とりわけユニオン・スクウェアなどで)とは考えがたい。これは、最後の「カメラ・アイ (51)」で扱われる、ハーラン郡の炭坑スト調査から帰った後の1931年の11月中-下旬に、炭坑夫支援のために話をした経験がここで使われているということではないか。*The Fourteenth Chronicle* の編者 Townsend Ludington によれば、「彼の永年の友ハロルド・ウェストンの覚えているところでは、ドス・パソスは、その

秋ニューヨークのウェブスター・ホールで、恥づかしそうに、頓着しない身なりで、聴衆の前に立ち、『たいへんだ、何を言ったらいいんだ』(Gosh, I don't know what to say)」と言ったという。(p.381.) 忠実に自伝的なこの「カメラ・アイ」だが、この種の改変は多少あるのだろうか。

### *The Camera Eye (50)*

they have clubbed us off the streets they are stronger they  
are rich they hire and fire the politicians the newspapereditors the  
old judges the small men with reputations the collegepresidents the  
wardheelers (listen businessmen collegepresidents judges America  
will not forget her betrayers) they hire the men with guns the uni- 5  
forms the policecars the patrolwagons

all right you have won you will kill the brave men our friends  
tonight

there is nothing left to do we are beaten we the beaten crowd  
together in these old dingy schoolrooms on Salem Street shuffle up 10  
and down the gritty creaking stairs sit hunched with bowed heads on  
benches and hear the old words of the haters of oppression made  
new in sweat and agony tonight

our work is over the scribbled phrases the nights typing re-  
leases the smell of the printshop the sharp reek of newprinted leaflets 15  
the rush for Western Union stringing words into wires the search for  
stinging words to make you feel who are your oppressors America

America our nation has been beaten by strangers who have  
turned our language inside out who have taken the clean words our

fathers spoke and made them slimy and foul

20

their hired men sit on the judge's bench they sit back with their feet on the tables under the dome of the State House they are ignorant of our beliefs they have the dollars the guns the armed forces the powerplants

they have built the electricchair and hired the executioner to 25 throw the switch

all right we are two nations

America our nation has been beaten by strangers who have bought the laws and fenced off the meadows and cut down the woods for pulp and turned our pleasant cities into slums and sweated the 30 wealth out of our people and when they want to they hire the executioner to throw the switch

but do they know that the old words of the immigrants are being renewed in blood and agony tonight do they know that the old American speech of the haters of oppression is new tonight in the mouth of 35 an old woman from Pittsburgh of a husky boilermaker from Frisco who hopped freights clear from the Coast to come here in the mouth of a Back Bay socialworker in the mouth of an Italian printer of a hobo from Arkansas the language of the beaten nation is not forgotten in our ears tonight

40

the men in the deathhouse made the old words new before they died

*If it had not been for these things, I might have lived out my life talking at streetcorners to scorning men. I might have died un-*

*known, unmarked, a failure. This is our career and our triumph.* 45  
*Never in our full life can we hope to do such work for tolerance, for justice, for man's understanding of man as now we do by an accident.*

now their work is over the immigrants haters of oppression lie  
quiet in black suits in the little undertaking parlor in the North End  
the city is quiet the men of the conquering nation are not to be seen 50  
on the streets

they have won why are they scared to be seen on the streets?  
on the streets you see only the downcast faces of the beaten the  
streets belong to the beaten nation all the way to the cemetery where  
the bodies of the immigrants are to be burned we line the curbs in 55  
the drizzling rain we crowd the wet sidewalks elbow to elbow silent  
pale looking with scared eyes at the coffins

we stand defeated America

やつらは棍棒で我々を通りから追い払った やつらの方が強い やつ  
らは金がある やつらは政治家新聞編集者年よりの裁判官名望家大学総長政  
界ボスの手先を雇ったり首にしたりする(聞け実業家大学総長裁判官よ ア  
メリカは裏切り者を忘れはしないぞ)やつらは銃を持った人間を雇う 制服  
警察の車護送車

よろしいおまえらの勝だ おまえらは今夜勇敢なるわが友を殺すんだ  
もう何もすることがない 我々は負けた 負けた我々はセイラム通り  
のこの古い汚い教室に集まっている 足を引きずって砂だらけの軋む階段を  
上ったり下りたりする背中を丸め頭を垂れて椅子に腰かけて抑圧を憎む者の古  
いことばを聞く そのことばは汗と苦しみの中で今夜は新しくなる

我々の仕事は終わった 走り書きされた語句 夜タイプライターを叩くと印刷所の匂いがする刷りたてのビラの鼻を刺す匂い ウェスタン・ユニオンへ走ってことばを連ねて電文をつくる刺すような鋭いことばを探してアメリカよおまえの抑圧者は誰か感じさせてやる

我々の国アメリカは我々の国語を裏返しにして父祖の話したきれいなことばをとりあげて泥だらけに汚してしまったよそ者たちによって打ち負かされた

やつらのお雇いの人間が裁判官の席に坐る州議事堂の円屋根の下でやつらは足を机の上にあげてふんぞり返るやつらは我々の信念を知らぬやつらはドル銃軍隊発電所を持っている

やつらは電気椅子をつくって死刑執行人を雇いスイッチを入れさせる

よろしいおれたちは二つの国民だ

我々の国アメリカは法律を金で買い牧場を柵で囲いパルプにするために樹を切り倒し気持ちのいい町をスラムに変え国民から富をまきあげたよそ者たちによって打ち負かされたそしてやつらが望む時に死刑執行人を雇いスイッチを入れさせる

しかしやつらは知っているか移民の古いことばが今夜血と苦しみの中で新しくなりつつあるということをやつらは知っているか抑圧を憎む者の古いアメリカのことばはピッツバーグからやって来た老婦人ここに来るために太平洋岸からずっと貨物列車に乗って来たサンフランシスコのしゃがれた声のボイラー製造工バック・ベイの社会奉仕家アーカンソーからやって来たイタリア人の渡り鳥印刷工の口から出ると新しいということを負けた国民の国語は今夜我々の耳について忘れられはしない

死刑因監房の二人が死ぬ前に古いことばを新しくしたのだ

こういうことがなかったとしたら、わたしは街角で軽蔑の目で見える人々に

話しかけながら一生を終えたかもしれない。知られることなく、目立つことなく、失敗者として死んだかもしれない。これが我々の人生であり勝利である。たとえ一生を全うしたとしても、今我々が偶然になしとげている、このような寛容、正義、人間同志の理解のための仕事ができるとは期待できないであろう。

今や彼らの仕事は終わった 抑圧を憎むこの二人の移民は黒い服を着てノース・エンドの小さな葬儀屋に静かに横たわっている 町は静かである  
 征服した国の国民の姿は通りには見えない

やつらが勝ったなぜ通りで姿を見られるのを恐がっているんだ 通りには負けた人々のしおれた顔が見えるだけだ 通りはこの二人の移民の遺体が火葬される共同墓地までずっと負けた国民のものだ 我々は霧雨の中を歩道の縁石に沿って並んでいる濡れた歩道にぎっしり集まっている黙って青白い顔をしておびえた目で棺を見ている

我々は敗れたアメリカとして立っている

43-47. *if it had not been for these things, ...* 「これは、サッコ・ヴァンゼティ事件でもっとも有名なことばで、バルトロメオ・ヴァンゼティのことばの直接の引用である。NANA の記者であったフィリップ・D・ストングによって、1924年4月の獄中インタビューの時に書き取られたものである。」(Marion D. Frankfurter and Gardner Jackson (eds.), *The Letters of Sacco and Vanzetti* (Dutton, 1960) のエピソードに付けられた註。)ドス・パソスは、ヴァンゼティのこのことばを数行短かくし、少し改変して引用している。なお、ストングのインタビュー全体の報告は、Isabel Leighton, *The Aspirin Age* (1949) (邦訳『アスピリン・エイジ』早川書房)に入っている。

「カメラ・アイ (50)」(*The Big Money*, pp. 413-14) は、サッコとヴァンゼティが遂に処刑された1927年8月23日未明のデモの民衆の怒りと敗北感を描き、

そしてアメリカが二つに分裂したと宣言する。

まず1—8行では、ドス・パソスは権力を持つおまえたちの勝だと認める。9—17行は、負けた我々にはもうすることがないと言う。27行の「よろしいおれたちは二つの国民だ」という強いことばをはさむ二つのパラグラフは、勝った者の態度、勝ったよそ者のやってきたことが怒りをこめて描かれる。33—42行は、12—13行、18—20行で述べたことを更に説明したもので、ここには、この作品 *U.S.A.* に特徴的なこの事件の意義づけをみる。すなわち、アメリカ建国当時の移民、アメリカ建国の父祖たちが抑圧を憎み自由を求めるという理想を語った時は、それは「きれいな、ほんものなことばであった。それを、「やつら」が「裏返し」にして内実のないもの、いやむしろ逆の意味にしてしまった。その父祖の話した「古い」ことばを信じて、その実現のために命をかけてきたのがイタリア移民のサッコとヴァンゼティであった。二人が殺されようとしている今、彼らを救おうと全国から集まってきた民衆(「われわれ」)の口からそのことばが出てくる時、移民の古いことばは新しくなる。つまり、移民の強調は、彼らの話すことばの強調で、そのことばにアメリカの理想、アメリカの夢、アメリカそのものを見る、というのがドス・パソスの考えである。続く43—47行は、死を前にして、自らの死を感動的に意義づけたヴァンゼティ自身のことばである。48—51行で二人は死に、最後のパラグラフでは負けた我々だけが雨の中に立っている。

*U.S.A.* 執筆の直接の契機になったと考えられるサッコ・ヴァンゼティ事件を扱った「カメラ・アイ」は二つあり、もうひとつは、この前の「カメラ・アイ (49)」で、そこでは、ドス・パソスがプリマスを訪れ、三百年前に初めての移民がこの地に足跡をしるしたことに思いを馳せながら、ここで魚の行商をしていたもう一人の移民、ヴァンゼティについて調べている。「ニューズリール」をひとつおいて、続く物語章「メアリー・フレンチ」の章は、救出委員会

の中心メンバーのメアリーが、二人の処刑三十時間前、デモの組織に走り回る最後の努力と厚い壁を前にしての疲労感、そして逮捕されるまでを描く。続く「ニューズリール LXVI」には、「ホームズ判事猶予を拒否」、「サッコとヴェンゼティを生かしてはならぬ」という見出し、そしてサッコが息子に宛てた手紙の一節が取り上げられ、この「カメラ・アイ (50)」に続いてくる。後述するように、1919, *The Big Money* では、「カメラ・アイ」と他の三つの構成部分との関連は一層密になっているから、この作品のクライマックスと言ってよいこの「カメラ・アイ (50)」の、「おれたちは二つの国民だ」という悲痛な叫びと、「二つの国民」の何れであるかはその話すことばによるというテーマは、この作品そのもののひとつのポイントにもなる。

### *The Camera Eye (51)*

at the head of the valley in the dark of the hills on the broken  
 floor of a lurchedor cabin a man halvesits halfies propped up by an  
 old woman two wrinkled girls that might be young chunks of coal  
 flare in the hearth flicker in his face white and sagging as dough  
 blacken the cavedin mouth the taut throat the belly swelled enormous 5  
 with the wound he got working on the minetipple

the barefoot girl brings him a tincup of water the woman wipes  
 sweat off his streaming face with a dirty denim sleeve the firelight  
 flares in his eyes stretched big with fever in the women's scared eyes  
 and in the blanched faces of the foreigners 10

without help in the valley hemmed by dark strikesilent hills the  
 man will die (my father died we know what it is like to see a man  
 die) the women will lay him out on the rickety cot the miners will

bury him

in the jail it's light too hot the steamheat hisses we talk through 15  
the greenpainted iron bars to a tall white mustachioed old man some  
smiling miners in shirtsleeves a boy faces white from mining have  
already the tallowy look of jailfaces

foreigners what can we say to the dead? foreigners what can  
we say to the jailed? the representative of the political party talks 20  
fast through the bars join up with us and no other union we'll send  
you tobacco candy solidarity our lawyers will write briefs speakers  
will shout your names at meetings they'll carry your names on card-  
boards on picketlines the men in jail shrug their shoulders smile  
thinly our eyes look in their eyes through the bars what can I say? 25

(in another continent I have seen the the faces looking out through  
the barred basement windows behind the ragged sentry's boots I have  
seen before day the stragglng footsore prisoners herded through the  
streets limping between bayonets heard the volley

I have seen the dead lying out in those distant deeper valleys) 30  
what can we say to the jailed?

in the law's office we stand against the wall the law is a big man  
with eyes angry in a big pumpkinface who stis and stares at us  
meddling foreigners through the door the deputies crane with their  
guns they stand guard at the mines they blockade the miners' 35  
soupkitchens they've cut off the road up the valley the hiredmen  
with guns stand ready to shoot (they have made us foreigners in the

land where we were born they are the conquering army that has  
filtered into the country unnoticed they have taken the hilltops by  
stealth they levy toll they stand at the minehead they stand at the 40  
polls they stand by when the bailiffs carry the furniture of the  
family evicted from the city tenement out on the sidewalk they are  
there when the bankers foreclose on a farm they are ambushed and  
ready to shoot down the strikers marching behind the flag up the  
switchback road to the mine those that the guns spare they jail) 45

the law stares across the desk out of angry eyes his face reddens  
in splotches like a gobbler's neck with the strut of the power of sub-  
machineguns sawedoffshotguns teargas and vomitinggas the power  
that can feed you or leave you to starve

sits easy at his desk his back is covered he feels strong behind 50  
him he feels the prosecutingattorney the judge an owner himself the  
political boss the minesuperintendent the board of directors the  
president of the utility the manipulator of the holdingcompany

he lifts his hand towards the telephone

the deputies crowd in the door

55

we have only words against

谷あいが一番高い山の蔭になったところにある傾いた小屋の壊れた床に一  
人の男が年老いた女に支えられて半ば坐り半ば横になっている二人のしわだら  
けの女の子は幼い子のようにだ石炭のかたまりが炉の中で燃え上がりねり粉のよ  
うに白く垂れた彼の顔にちらちら映える落ち込んだ口ピンと張ったのど石炭選  
別場で働いている時怪我した傷で大きくふくれ上った腹部を黒く見せる

はだしの女の子がブリキコップに水を持って来てくれる　　女が汚いデニムの服の袖で彼の顔の流れ出る汗を拭く　　炉火が熱を出して大きく開かれた彼の目女のおびえた目そしてよそ者の青ざめた顔に光る

助けもなくストライキ中で静まりかえった暗い山に囲まれた谷あいでの男は死ぬだろう(わたしの父も死にました人が死ぬ時はどんなものか知っています)女は彼をがたびしの簡易寝台に寝かせ炭坑夫たちは彼を葬るだろう

監房は明るくとても熱いスチーム暖房がしゅうしゅう音をたてている緑色に塗った鉄格子ごしに背の高い白い口ひげの老人数人のワイシャツ一枚ののこにこした炭坑夫一人の少年に話しかける　　炭坑で働いていた時の白かった顔がもう囚人特有の青白い顔に見える

よそ者たる我々が死者に何が言える？　　よそ者の我々が囚われた人たちにどう言ったらいい？　　その政党の代表は格子ごしに早口でしゃべっているわが党に入らないか他のどの組合も駄目だ我々はタバコキャンデー連帯を送ろう我々の弁護士は準備書面を書いてくれる集会では弁士はきみたちの名前を叫ぶビケラインではきみたちの名前を書いたプラカードを持って歩く　　囚われの人たちは肩をすくめかすかに笑う我々の目が格子ごしに彼らの目をのぞく  
ぼくに何が言えよう？

(別の大陸でぼくは見張りの破れたブーツの後ろの鉄格子のはまった地下室の窓から顔がのぞいていたのを見たことがある夜明け前に列を乱しがちの足の痛む囚人たちが銃剣の間をびっこをひきながら通りを一団となって歩かされるのを見たことがある　　一斉射撃の音を聞いた

あのはるか遠い山奥の谷で死者が倒れているのを見た)囚われの人たちにどう言ったらいい？

裁判所で我々は壁を背にして立っている法律は大きなかぼちゃのような顔

をした怒った目つきの大男　椅子に坐っておせっかいの我々よそ者をにらみ  
つけるドアから銃を持った保安官がのぞく　彼らは炭坑の警備をする　彼  
らは炭坑夫のスープ接待所を封鎖する　谷あいを上ってゆく道路を断つ  
この銃を持った雇われ人たちはいつでも撃てる用意をしている(彼らは我々を  
生まれた土地にいるのに外国人にしてしまった彼らはいつの間にかこの国に侵  
入した征服者の軍隊頂上をひそかに占領し通行税を取り立て鉱山のとっぺんに  
立つ　投票所に立つ　執行官が市営の棟割長屋から追いたてをくった家族  
の家財道具を歩道に運び出す時傍に立っている銀行が抵当の畑を取り上げる時  
も傍にいるストライキ中の人々が炭鉱までジグザグの道を旗について行進して  
行く時待ち伏せしていつでも撃ち殺せる用意をしている　撃ち殺さないもの  
は刑務所にぶち込む)

法律が机ごしに怒った目でにらむ彼の顔が雄の七面鳥の首のようにまだら  
に赤くなる軽機関銃短い散弾銃催涙ガス嘔吐ガスの力に支えられてその力は食  
べ物を与えることもできるし放っておいて飢え死にさせることもできる力

机のところに楽々と腰かけ背後は守られて彼は強いと感じている彼の後ろ  
には検察官判事炭坑の所有者自身政治ボス炭坑監督官重役会ガス会社の社長持  
株会社の黒幕がついていると思っている

彼は電話の方へ手をのばす

保安官が入口にいっぱいいる

対抗するに我々はことばしか持たぬ

「カメラ・アイ 51」(*The Big Money*, pp. 463—64) では、餓死しかけてい  
る、また囚われている炭坑夫に主人公は言うべきことばを持たず、また圧倒的  
に強い権力に対してわずかにことばしか対抗するすべのないことを知る。これ  
が U.S.A. 最後の「カメラ・アイ」である。

1—14行の三つのパラグラフでは、ストライキ中の炭坑夫たちの惨状がリアルに描かれる。(一般に、後半の「カメラ・アイ」の文章はより写実的で平明である。)15—25行では、デモやピケで逮捕されて囚われている炭坑夫たちを、主人公や他の労働運動グループ、政党の指導者らが訪れる。囚われた人々に主人公らは何も言えないと思うのに反し、「その政党の代表」は、党の宣伝を始める。26—31行の括弧の部分は、Melvin Landsberg によれば、「1921年の赤色コーカサス地方の恐怖や飢饉」(*Dos Passos' Path to "U.S.A."*, p. 170) の記憶が対置されているというが、唐突な連想ではなかろうか。32行からの後半では、裁判所で、あらゆる権力を持って炭坑夫たちを抑圧する相手に対し、支援しようとする主人公らにはことばしか対抗する武器がないことが述べられる。

この「カメラ・アイ (51)」は、1931年11月、ドライサーらと共に、戦争とも言えるほどに激しいストの行われているケンタッキー州ハーラン郡の炭坑ストを調査した時の経験が描かれている。この時の経験は *Adventures of a Young Man* (1939) に詳しいが、*Theme Is Freedom* (pp. 73—88), *The Best Times* (pp. 227—30), そして *The Fourteenth Chronicle* には、National Committee to Aid Striking Miners Fighting Starvation の議長としての公開状もある。(p. 401.) 興味深いのは、この「カメラ・アイ」で、ドス・パソスは初めて共産党批判をすることである。伝記的には、いわゆる「同伴者」であった彼は、しばらく続く動揺の時期を経て、1934年初めに、共産党不信、「伝統への回帰」を口にするようになる。*U.S.A.* の第三部 *The Big Money* は、ドス・パソスの「転回」点以後の1936年の出版だから、共産党批判があっても当然だが(もちろんそれは物語章にも認められる)、それは決して強調されてはいない。

伝記的事実は別にして、「カメラ・アイ」をずっと辿ってみる時、「カメラ・アイ (25)」あたりからはっきり見られた、心情的ラディカリズムの持主である主人公が、先の「カメラ・アイ (40)」の「疑いという玉ねぎの皮」をむいてきて、

ついにここに到ったと考えることができる。

### 「カメラ・アイ」とはなにか

—まとめに代えて—

U.S.A. (1938) 三巻には51の「カメラ・アイ」がある。すなわち、第一部 *The 42nd Parallel* (1930) に27, 第二部 *1919* (1932) には15, 第三部 *The Big Money* (1936) に9である。従って、「カメラ・アイ」の大半は、第一部に集中していることになる。そして、初めの方と後半とでは、その内容や他の三つの構成部分との関連は変化している。第一部の「カメラ・アイ」は、その多くが一頁以内の短いものであり、幼少時のドス・パソスに強烈な印象を残した出来事、経験をその内容とする。父母とのちょっとした旅、変な匂いのする工場の近くの池での転んでばかりのスケート、寮での他の少年とのけんか、曳き船の船長のかき取りの話、母の友人の上流婦人のいやな質問などである。従って、これらと他の三つの部分との内容上の関連は薄く、他の部分の大きな流れの上に点々と「カメラ・アイ」の部分が浮いているように見える。つまり、「カメラ・アイ」は、むしろ他の部分から独立した異質の部分と考えた上で、両者の時代的照応とか、「物語」部分の登場人物の少年時代と「カメラ・アイ」の主人公のそれを比較したりする。

それが、第一部の終り頃の「カメラ・アイ」から、長さも二頁前後と長くなり、他の三つの構成部分、「ニューズリール」、「物語」、「伝記」との関連はより緊密になってくる。たとえば、「カメラ・アイ 40」は、戦争とかロシアとかいうことばが出ると拍手がわくマディソン・スクウェア・ガーデンでの政治集会の情景、続く「ニューズリール XVIII」は、ウィルソン大統領の宣戦布告演説、徴兵制強行などの見出しを含み、それに続く「エリナー・ストダード」の章は

彼女が赤十字に入って大戦下のフランスに行こうとするところで終り、更に「ニューズリール XIX」はアメリカ参戦を伝え、次いで「カメラ・アイ (27)」では主人公ドス・パソスがフランスに渡り、続く「伝記」のラ・フォレットはアメリカ参戦に反対してウイルソン大統領に立ち向かい、第一部をしめくくる「物語」章ではチャーリー・アンダソンがやはりフランス行き船に乗っている。つまり、第一部の終りは、どの部分もアメリカの第一次大戦参戦をその主たる内容とする。そして、このような、「カメラ・アイ」と他の部分の内容上のより密接な関連は、概して終りまで変わらない。「カメラ・アイ」は自伝的であることに変わりはないが、他の部分との関わりを十分考慮した上でその内容となる出来事、経験が選ばれている。

また、このことと関連して、後半では、その文章も違ってくる。例外も少ないが、敢えて割り切って言えば、「カメラ・アイ」の文章は、後半はより散文的になる。印象主義的なスケッチは少なくなって、論理を辿って読む文章が多くなる。伝えたい内容、主張があって、それだけ意味が重視されているということである。今回取り上げたものはすべて後半のものであったが、その中で「カメラ・アイ (39)」は、前半の「カメラ・アイ」に特徴的なリリカルな瞬間の印象のスケッチ、断片化されて筋道の辿りにくくなった反逆精神をうかがわせることばのはしばしを連ねたものである。これと対照的に、「カメラ・アイ (51)」は、伝達を心がけた平明な文章である。ただ、句読点のない文章、一語に綴られた語、名詞の羅列、語句の繰り返し、また、これらのすべてがつくり出す文章の直線的な早い流れは終始変わらない。

そもそも、ドス・パソスは、どうして「カメラ・アイ」という技巧を考えついたか。それを、後年の二つのインタビューでは次のように言う。

わたしのやり方は、いつも、客観的に書こうとするということでした。そ

れで、『U.S.A.』に「カメラ・アイ」を入れたのです。それは、わたし自身の経験を、直接少しばかり入れることで、主観的なものを捌けてしまう方法でした。(First Person, p.52)

伝記においても、ニューズリールでも、そして物語でさえも、わたしは相対立する考え方を出して完全な客観性をめざしました—カメラ・アイをわたし自身の主観的な感情の安全弁として使って。カメラ・アイのおかげで、他の部分を客観的なものにするのはずっと楽でした。(Writers at Work, Fourth Series, p.81)

すなわち、他の構成部分を、主観を交えずまったく客観的に提示するために、自身の主観的な感情の吐け口として「カメラ・アイ」の部分を用いたと説明する。

この作者の側の創作のメカニズムの説明から考えた場合、51篇の「カメラ・アイ」を通して、この「わたし自身の主観的感情的安全弁」という役目は変わっていない。初めの方では、ドス・パソスは、自身の幼少年時代の忘れがたい記憶を、他の部分で表わされる大きな歴史の流れとはほぼ無関係に放り込んでいった。それは確かに彼自身の感情の吐け口になったであろうし、他の部分の客観的な叙述を容易にしたであろう。そしてそこには、「カメラ・アイ」という短い散文詩によって他の部分にコメントを加えるという意図は見られない。それが、たとえば今回取り上げた「カメラ・アイ」(50, 51) では、自身が積極的に歴史の流れに関わることによって、つまり、サッコ・ヴァンゼティ事件やハーラン郡炭坑争議に直接参加した体験を、より長く、より写実的で論理的な文章で書くことによって、作者の分身、いや作者その人という「登場人物」となって発言している。これは、一般に、小説の中で作者が顔を出すとか、ある部

分が作者自身の声と考えられるというようにな生やさしいものではなく、はっきり、作者の発言の場、枠が確保されているということで、それが「カメラ・アイ」ということになる。

以上は、作者ドス・パソスの側からみた「カメラ・アイ」の存在理由ということになるが、次に、この技巧の持つ意味を別の角度から考えねばならない。

Robert G. Davis は、「カメラ・アイの部分はすばらしく、『U.S.A.』は、社会的現実そのものではなく、特定の過去を持った特定の人物によって見られた社会的現実を描いているということを気付かせてくれるものだ」(*John Dos Passos*, p. 22) と言う。確かに、読者の側から見れば、「カメラ・アイ」がでてくるとに常に同じ主人公に出会い、この主人公はドス・パソス自身で、他の三つの部分を眺めている人物だと感じるようになる。(ちなみに、「物語」部分は、それぞれその名を冠せられた12人の主要人物の視点から三人称で語られるのであって、「カメラ・アイ」は、いわゆる「視点」ではない。)「カメラ・アイ」は、まさにその名の通り、他の部分に描かれるようなアメリカの現実を距離をおいて冷静に見る「カメラの眼」という機能、役割をさして名付けられたものであろう。そして、この常に同じ「カメラの眼」によって見られた三つの部分、「特定の過去を持った特定の人物によって見られた社会的現実」は、当然、それなりの秩序を持っている筈である。つまり、「カメラ・アイ」は、対象たる現実を選択して写していて、そこには「カメラ・アイ」の主人公ドス・パソスの20世紀アメリカの社会的現実、歴史(アメリカの資本主義的發展、第一次大戦、労働運動の弾圧、金や性に対する肥大した欲望、家族の崩壊など)を彼なりに構成し意味づけようとする意志が働いていると考えられる。冷静で客観的に写すということは、何でもあるがままに写すことではなく、他の部分を、ひいては『U.S.A.』という作品を、ひとつの秩序、意味を持った全体とするための方法、原理である筈で、そのための「カメラ・アイ」である。そ

うであるならば、この『U.S.A.』という作品におけるドス・パソスの歴史を描く方法を露わに示す名を持っているこの技巧は、客観描写と意味付与という二つの機能を持つと要約できる。

しかも、これまでみたように、「カメラ・アイ」は、ただのレンズや鏡と違って、それ自身の内容を持つ。このことと、「カメラ・アイ」の二つの機能とを合わせ考えるならば、それ自身の内容を持つものが、原理、方法として作用しているということである。つまり、それ自体作者の自伝であり、『U.S.A.』の一構成部分でありながら、『U.S.A.』全体の物語の原理である。そして、その徹底した外面描写によって生まれた意味ある世界、『U.S.A.』の世界が、執拗なまでに一貫して単調な世界であるのは、この「カメラ・アイ」という方法が貫かれているからである。

これは、逆に言えば、大橋健三郎氏の「カメラ・アイ」という「技術的な意味合いを孕んだ用語そのものに、ある特別な、重要な精神的意味を付与しようとしている、その根源的な矛盾」という指摘の正しさを証明することになるかもしれない。すなわち、「想像力の働きを律すべき作家の眼」の役割は、「カメラ・アイ」という「事物的性格」を持ったものでは単調な世界しか生みだせないということになるわけである。(引用部分は、「アメリカ文学の特殊性と世界性—小説にみる「アメリカの想像力」の構造をめぐって」 『総合研究アメリカ ⑥—思想と文化』(研究社)の288, 289ページから。)ドス・パソスの語る20世紀の開幕から30年のアメリカの歴史は、直線的にひたすら先へ流れる。「物語」の人物も、「伝記」の歴史上の人物も、この大きな流れにけっきょくは流されてゆく。この物理的なクロノロジカルな時間の流れの表現は、「カメラ・アイ」という距離をおいて「見る」ことに徹した方法、いわば限定された想像力の働き方によってはじめて可能になったと言えるのではないか。「カメラ・アイ」という技巧によって生まれた意味、秩序は、まさにこのような、一様

な濃淡のない歴史，時間の流れに他ならない。この単調さこそが作者のめざすものであったとすれば，「器械的」，「技術的」な「カメラ・アイ」は，その性格ゆえに，それにふさわしい「精神的」な意味を生みだしていると言えるであろう。